

令和元年お盆法話

妙好人的な人から学ぶ

正信寺 釋英和

令和元年七月十五日 正信寺 お盆 法話

妙好人的な人から学ぶ

釋英和

【はじめに】

本日は、お忙しい中、お参りいただきまして、ありがとうございます。令和に入って最初の法話は、妙好人のような人についてお話ししたいと思います。

【妙好人とは】

妙好人というのは、どのような人かご存じでしょうか。妙好人の定義は、「浄土教の篤信者、特に浄土真宗の在俗の篤信者を指す語である」といいます。

語源は、善導大師の『観無量寿経疏』散善義において、「もし、念仏するものは、すなわち、これ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。」と称賛したことにあります。もともとは念仏者・浄土願生者を指す言葉でした。

しかし、現代に伝えられている妙好人は、江戸から明治初期に何編か編纂された妙好人伝によるものです。妙好人は、その人の行動や言葉について、称賛された人に思えます。

人は、いろいろな欲求を持っています。お金持ちになって贅沢をしたい。立身出世して人から認められたい。おいしいものを食べたい。などなどです。しかし、世の中から尊敬されているにもかかわらず、そういった欲求、あるいは煩悩とは、無縁の人もいます。そうした人は、儒教を学んで「中庸」を実践しようとか、仏教でいう「執着を捨てよう」「煩悩

を滅しよう」と意識して行動していないようにも見えます。そのように思われることを、自然なふるまいの中に実践している人を「妙好人」と呼ぶのだと思います。

現在のように、フェイスブックやSNSがあれば、こうした人の行動をだれでも知ることができるのですが、江戸や明治時代に生きた、市井の人の良い行動が、伝え続けられて残されているということは、妙好人の行動が人々に強い影響を与えたのかということが想像できます。

妙好人の生き方は、どこか憧れるものがあります。

妙好人の生き方からは、学ぶことが多いのではないかと思ひ、今日のお話としたいと思います。

【妙好人との出会い】

平成七年に「白川郷・五箇山の合掌造り集落」がユネスコ世界文化遺産に選ばれ、さらに、北陸新幹線が開通したら人が溢れるのではとおもひ、新幹線開通三年前の平成二十四年、自家用車で金沢・能登・白川郷に旅行に行きました。多くの人が訪れる五箇山の合掌造り集落から少し離れた、赤尾という谷あいにある集落に、道宗記念館がありました。

現地に住む妙好人が、かたい薪の上で寝ていたとか、遠くまで、聞法に出向いたということ展览展示してありました。これが、私と妙好人の出会いです。

記念館の閉館時間が迫っていたので、急いで見学したため、あまり記憶に残っていないのが残念でなりません。

蓮如上人と赤尾道宗について、改めて調べた内容について紹介したいと思います。

赤尾道宗は、幼名を弥七といいました。四歳で母、十三歳で父を亡くしました。真実の仏法を求めて旅をし、京都で蓮如上人に巡り合い、仏法に目覚めました。道宗という名前は、蓮如上人から与えられた名前と言われています。

二十六歳で、五箇山の自宅に聞法道場を開き、念仏を唱える場としました。その道場のある赤尾から、庄川の下流約三十キロの場所に、浄土真宗の越中布教の拠点となる瑞泉寺がありました。蓮如上人が瑞泉寺で説法をするときには、道宗は、夜中に自宅を出て、三十キロの道のりを歩いて瑞泉寺に向かい説法を聞く毎日でした。蓮如上人の説法が終わると、同じ道のりを八時間かけて歩いて帰り、野良仕事をしていたといいます。そして、また、夜半に起きて翌日の説法を聞きに三十キロの山道を歩いたといえます。三十キロといえば、当時の徒歩で旅行する人の一日分の旅程で、それを往復していたわけです。箱根駅伝では、三区間分で、大手町から平塚中継所に相当する長い距離です。

道宗は、「朝のお勤めに間に合わなかったら、三年続けて飢饉にあったほどの、取り返しのつかない損失だ。」といったと伝えられています。

蓮如上人が瑞泉寺で年を越されたとき、元旦の勤行を務められました。ところが、折しも記録的な大雪が降り、道宗は途中の峠で身動きが取れなくなってしまうと、雪の中をさがしましたが、なかなか進むことができませんでした。

蓮如上人は、「道宗のことだ。必ず来る。」と、勤行の時間を少し伸ばすことにしました。勤行の初めには、喚鐘を打ち鳴らすのが習わしですが、蓮如聖人の命で伸ばすことにしました。

しばらくすると、一面真っ白な雪の中に動く点が現れました。まさに、道宗が一生懸命、元旦のお勤めに間に合うように歩いてきたのです。雪だるまのように転びながらやってきたと伝えられています。

蓮如上人は、それを見て、鐘と太鼓を打ち鳴らすように命じました。

以来、瑞泉寺では元旦の勤行前に鐘と太鼓が打ち鳴らされ「道宗打ち」と呼ばれるようになり、今でも続いているといわれます。

道宗が、善知識のご説法をいかに大切にしていたかがうかがわれます。道宗は、京都山科本願寺にも、十数日かけて参詣したといわれています。同じような説法を聞いても、初めて聞いたようにありがたがったといえます。

御一代記聞書百三十一に、「道宗は、ただ一つの御言葉を、いつも聴聞申すが、初めたるように、ありがたき由、申され候」と記録があります。

【妙好人の特徴】

妙好人と呼ばれる方には、次のような特徴があると思います

一、もともとは、僧侶ではない（仏教を生業としていない）。

妙好人は、下級武士などでしたが、多くは市井の人でした。

赤尾の道宗は、旅先で蓮如上人に会ってから、篤信家になりました。

二、不幸を経験している。

両親を幼少のころに亡くしたり、自分の子供がなくなったりしています。不幸のどん底から立ち直ると、他人を見る目が優しくなるように思えます。

三、自然体で、他人を押しつけて自立とうとはしてない。

良いことをして、極楽往生しようというような意識が感じられないのが、妙好人の特徴だと思っています。他力本願というと、簡単な表現なのですが、妙好人の言葉には、神仏にすがるといったりは、何かに突き動かされて自分の信じることを実行しているというように思えます。

四、行動から仏教の教えを感じさせる。

妙好人は、どこかで仏教に触れているのですが、門徒として優等

生的な行動ではなく、どこか、不器用で、一途で、ユーモアを感じさせる行いをします。妙好人の良い行動は、人に嫌みを感じさせず、慈しみや菩提心を感じさせ、ほほえましい感覚を持つことが多いと思います。

五、結果的に、他人にも良い影響を与える。

妙好人が良い行いをしたことを聞かされて、自分には同じことができないなあと感じることもあります。しかし、妙好人の存在感には、何故か親しみが有り、別世界のことではないように思われます。その結果、私たちに、自分でできることをやってみようという影響を与えてくれるように思います。

妙好人は、決して自分は妙好人になろうと思っていないと思います。

道宗は、蓮如上人に出会って、その言葉に真実を感じて、その真実を純粹に、徹底的に求めただけなのだと思いますが、その生きざまが真摯で、人々を超越していたので、後世に語り継がれる人になったのだと思います。

【現代の妙好人的な人】

妙好人の話をする時、過去の日本の良い時代の話だと思っても多いかと思えます。しかし、現代でも、妙好人のような人は居るのではないかと思います。

次に紹介する二人は、浄土真宗の篤信家ではありませんので、妙好人と呼べませんが、先ほどの五つの特徴から妙好人のようだと感じましたので、ご紹介します。

スーパーボランティア尾島春夫さんを、皆さんはご存じだと思います。

鉢巻をして、つなぎの作業着をきて、神出鬼没に災害地に現れます。尾島さんの滅私の気持ちはどこから出てきたのでしょうか。

尾島さんも、幼少のころは幸福ではなかったようです。尾島さんのお父さんは、下駄職人だったのですが、履物が靴に代わり、下駄がサンダルに代わる時代で、商売は順調ではなかったようです。尾島さんが小学校五年の時、お母さんが四十一歳で他界します。酒好きだった父はやけ酒に走り、七人兄弟の四男の春夫さんを、小学校五年で近所の農家に奉公に出してしまいました。奉公先の機嫌を良くして、御飯を満足に食べたいという動機だったようですが、「奉公先の主人や家族を親だと思いたい、何でも言うことを聞く」ようにして過ごしたそうです。

尾島少年は、昭和三十年に中学は卒業しているものの、奉公の仕事のため中学には四か月しか通えなかったそうです。普通なら恨みの対象となる父親も、いつしか感謝の対象になっていったといえます。

中学を卒業すると、鮮魚店の小僧になります。別府駅に向かうとき、父親から十円札を三枚持たされ、さすがに別れの時は、この父親でも大盤振る舞いをしてくれると思ったそうです。でも、勤め先までの切符を買おうと残金がないことを知り、これは、帰るといふ選択肢がない片道切符だということを知ります。

鮮魚店で修業中、売れ残った魚のあら煮を食べさせられたのですが、芋と南瓜ばかり食べていた尾島さんは、「こんなうまいものはない！」と衝撃を受けたそうです。

魚屋で修業したのち、自分で独立し開業しようと考えていましたが、給料が安く貯金ができなかったようです。開業資金を稼ぐため上京し、鳶・土木の会社に三年間勤めます。この時の、鳶や土木工事の経験が、現在のボランティア活動に役立っているようですが、当時は、そうしたこ

とを知る由もありません。この会社からは、残つて頭になれと熱心に進められました。大分に戻り、結婚して、別府市内に「魚春」を開業しました。持前の性格で、人気店となりました。

四十歳で登山を趣味で始め、四十五歳で北アルプス五十五山を単独縦走しました。その後、地元の由布岳で山道整備のボランティアを始めます。

六十五歳で鮮魚店を閉店し、日本列島三千三百キロを三か月で縦断する旅に出ます。四国八十八か所のお遍路にも出ました。お遍路は自力の行為と思うかもしれませんが、この旅で、人との出会いの大切さに気づき、報恩感謝の気持ちを持ちます。収入は年金だけで、ボランティア活動に専念します。

新潟中越地震、東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨など、多くの被災地に赴きました。東北の三陸町では、がれきの中に埋もれた思い出の写真を集める「思い出探し隊」として五百日活動しました。この時、好きだったお酒をやめたそうです。これは、一生やめたわけではなく、仮設住宅に住む方がなくなるまでやめると決心したそうです。

平成三十年、ユーキャン新語・流行語大賞で「スーパーボランティア」という言葉が選ばれましたが、これは、尾島さんのことというのは、だれもが知ることです。ですが、尾島さんは、受賞を辞退し表彰式にも出席しませんでした。表彰式で、司会者は、「頭が下がる思いです。」とコメントしました。

自ら計らわず、名声を追わず、やるべきことをやる。

これほどかっこいいことはありません。ですが、誰でもできることではないと思います。尾島さんは、中学を卒業しましたが、四か月しか通学していないといえます。高等教育は受けていません。ボランティアを、金儲けのためにやっているわけでもありません。さらに、今年の十月には八十歳になられ、年齢的にも体力的にも厳しいのではないかと推測しますが、気力・体力とも充実しているように見えます。それでも、社会の中で困っている人たちのためになることをする。報酬は受け取らず、救済をする仕事をするわけです。

この無心の行動こそ、私は妙好人的だと思いました。

次に、ご紹介したのは、女優の樹木希林さんです。

デビュー時には、悠木千帆という芸名でした。

樹木希林さんは、有名な女優さんで、昨年九月十五日に全身に癌が転移して亡くなりました。テレビドラマ、「時間ですよ」や「寺内貫太郎一家」でブレイクし、後年は「万引き家族」「あん」など、映画のストーリーの中では、なくてはならないキャラクターを演じてきました。

女優というと、華麗な生活をイメージしますが、樹木希林さんは、違いました。

樹木希林さんの父は、警察官をしていましたが、東京神田でカフェ経営をしていた七歳年上の母と結婚します。父は、カフェの主人に収まりますが、ある意味趣味の琵琶にのめりこみ無収入になります。

横浜の野毛に「かのうや」という居酒屋があり、私がランドマークタワーにあったオフィスに勤めていた時には、「かのうや」に何度か飲みに行ったことがあります。ここは、神田のカフェをたたんだのち、樹木希林のお母さまが経営していたお店で、今でも、営業しています。

高校時代は、演劇部に所属しながら、薬剤師を目指していましたが、大学受験直前にスキーで足を骨折し、大学進学をあきらめます。大きな挫折を経験しています。

そこで、文学座の試験を受けます。受験者は千人いましたが、一期生として付属演劇研究所に入ります。彼女は文学座に合格することで、女優として生きていく覚悟ができたのではないかと思います。挫折をプラスに変える心意気は、後の成功に通じるものがあるのではないかと思います。

その後は、女優として活躍するのですが、樹木希林さんの言葉をまとめた『一切なりゆき』という本を読むと、なかなか一筋縄ではなかったようです。

まず、第一章の「生きること」には、こだわりのない、欲のない生き方が示されます。あれだけ売れた女優ですが、身の回りのものは、ある物を大切にした質素な生活でした。日常では、知り合いの男性物の下着を貰って着たり、ブラウン管のテレビを長々使っていたりしたことが記されています。

一番驚いたのは、彼女が一番得したことは、自分が「不器量というか不細工だったこと」と書いていることです。女優なのに、輝く女優より不細工で得したと思えるというのは、すごいことです。不幸を、不幸と思わないことだと思います。それより、美人が集まる芸能界で、演劇やドラマの中では、お手伝いさんとか悪役、脇役に美人を配役しづらいこともあるなか、彼女はいい役を得てきたと思うそうです。

自分の立ち位置を、過大に評価せず、かといって、卑下することもな

いように、等身大に見られることは、一種の天性なのでしょう。

次に驚いたことは、ロックミュージシャン内田裕也さんと結婚して、すぐに別居しました。さぞかし不幸だったのかと思いましたが、そうでもなかったことです。わがままに見える内田裕也さんの優しさを見抜き、うちに秘めた情熱というか、破天荒でめちゃくちゃなところを、憎むことなく受け入れます。若いころは家庭内暴力がひどく、それに反発していたようですが、内田裕也という凶暴な人格をみると、醜くても自分のほうがまともなのかと安心できたといいます。本の中では、「実は救われていたのは自分のほう」という言葉を残しています。

現実を、現実として受け止め、前向きにとらえる。悲観せず、楽観的にとらえるということが、心の平安をもたらすようです。

全身に転移した癌でさえ、死ぬ病気を得たことで生き方を見直してよかったという言い方ができるといえるのは、なかなか、肝の座った人だと思えます。普通、全身癌に侵されていると知ったら、おいしいものを食べて、旅行をして楽しんで死のうと思うと思えます。しかし、最晩年の映画「あん」を見ましたが、ハンセン氏病患者で、人から差別を受け、中傷されながら、和菓子のおんこを作るのがうまい女性の役を演じていました。何か、樹木希林さんの一生を集約しているような役でした。死が忍び寄っているのですが、天職として与えられた女優を全うし、そして、人に力を与えてくれたのだと思います。

こういった言葉や行動は、人に影響を与えます。私たちは、その生きざまから、いろいろと学び、自分の生き方を豊かにできると思います。

【力をもらい、活き活きと生きる】

人に力を与えようとして、良いことをして頑張つて生きたところで、多くの場合、人からは、余計なお世話と思われたり、胡散臭く思われたりすることが多いと思います。

それよりは、自分のできる範囲で、できることをしつかりやる。これはこれで、難しいことですが、結果的に、何事にも前向きに、活き活きと生きることが大切なことではないかと思えます。

計らいを捨てて、信じることを行う。信じることを行うことは、自利のように思いますが、結果的に他人にいい影響を与えることは、利他の行動につながると思えます。

言葉で書くとは簡単ですが、その行為の後ろに、他人に良いことをして尊敬されようとするとか、かわいそうな人に施しをするというような上から目線の気持があると、驕りにつながります。すると、他人のために良いことをしたのに、負の評判が立つようなことになります。つまり、名声を得るためにやっているのだという、マイナス評価を受けるようなことが生じてしまいます。

【おわりに】

現代に生きる私たちは、妙好人伝に出てくるような、昔ながらの妙好人になろうとしてもなれないと思います。いえ、妙好人になろうとすること自体が自力になります。

自分の信じたことを行うことは、何かに突き動かされてすることなのかもしれないと思います。これは、実は他力なのかもしれないと感じることがあります。

すなわち、妙好人の価値は、良いことをしているのですが、自力で良いことをしていないことだと感じます。自分のやるべきことを信じて、

二心なく、ぶれなく実行すること、それを自然体で実施すると良いのだと思います。そして、その行為が、いいことをした対象の人だけでなく、周りの人にもいい影響が出てくるのだと思います。

現代社会では、なかなか、浄土真宗の価値観の中だけで、妙好人になるのは難しいと思います。ただ、昔の妙好人に学び、現代の妙好人のような人から力を貰い、政治も経済も気候も人間関係も、何が起ころかわからない現状を受け入れて、皆さんも一途に生きること、皆さんだけでなく多くの人が活き活き生きることができるといいと思います、本日のお話を締めくくりたいと思います。

本日は、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

浄土真宗

安養山 正信寺